

# ホリデイ

2007(平成19)年3月24日鑑賞(三番街シネマ)

★★★★



## 第1章

### ミュージカル & コメディ

監督・脚本・製作=ナンシー・メイヤーズ/出演=キャメロン・ディアス/ケイト・ウィンスレット/ジュード・ロウ/ジャック・ブラック/イーライ・ウォラック/ルーファス・シーウェル/エドワード・バーンズ (UIP 配給/2006年アメリカ映画/135分)

……『恋愛適齢期』で「恋愛に年はない！」とアピールした恋愛モノの大家(?)ナンシー・メイヤーズ監督の今回の着目点は、ロンドンとロサンゼルスに股にかけた「ホーム・エクスチェンジ」。境遇の変化は、傷心の女性の心を開き、新たな勇気を与えるもの……? 仕事とカネはあっても恋に縁遠い女性や、長年見つめてきた彼氏に振られた女性は、1度これにチャレンジしてみても……? しゃれた愛情表現満載のこんなロマンティック・コメディは、きっとあなたの心を豊かにしてくれるはず……。

## 女流監督ならではの「ピカッ！」と光る感性がいっぱい!

この映画を監督・脚本・製作したナンシー・メイヤーズは、「恋愛に年はない！」というテーマをコメディータッチを交えながら真剣にかつ心温かく描いた名作『恋愛適齢期』(03年)で有名な女流監督。彼女の生まれた年が私と同じ1949年と聞き、なるほどとうなずき感心したもの(『シネマルーム4』331頁参照)。そんな恋愛モノの得意な(?)ナンシー・メイヤーズ監督が、アメリカのロサンゼルスとイギリスのロンドンという二大都市を股にかけた恋物語を監督・脚本・製作したのは、今欧米で注目を集めているという「ホーム・エクスチェンジ」に着目したため。恋に悩む2人の女性が、2週間という期間限定のホーム・エクスチェンジによって、新しい環境に身をおいたら……? ホントはそんなことをしても何も変わらない可能性が高いのかもしれないが、この映画では、全く異なる環境に身をおくことによって2人のヒロインには劇的な変化が……。『恋

『愛適齢期』と同様、女流監督ならではの「ピカッ!」と光る感性がいっぱいだから、今回は60代の恋に悩む男性ではなく、30代の女性必見の映画に……。

## ハリウッドにはこんなリッチウーマンが……

ロサンゼルスの大豪邸に住んでいるアマンダ（キャメロン・ディアス）の職業は、ハリウッドの映画予告編製作会社の社長。私は今、月間約25本、年間300本弱の映画を観てその評論を書いているが、この映画評論家稼業は弁護士稼業と二股をかけたものだから結構大変……。しかし、もちろんアマンダはそれ一筋の仕事だから、観ている映画の数は私の数倍だし、映画が大ヒットすれば予告編製作会社にも莫大な収入があるはず。そして、仕事が順調だからこんな大豪邸に住んでいるのだろうが、思うようにいかないのはオトコだけのよう……？

今、アマンダが激しく言い争っている男性は、映画音楽作曲家のイーサン（エドワード・バーンズ）。その原因は、イーサンがファンの若い受付嬢と浮気したためらしいが、頑強に否認し続けているから、アマンダはヒステリックに自白を強要中……。そして、「素直に自白すれば許してあげるから……」という甘言ののって、イーサンが「ホントは……」と自白したのが運の尽き……。「お前なんか出ていけ!」と追い出されてしまったから、実はこのイーサンはアマンダの夫ではなく、単に同居してただけの彼氏だったことやこの大豪邸がアマンダの所有だったことがわかり、ビックリ……。

## ロンドンにはまだこんな女性が……

アメリカに比べると、イギリスはずっと保守的な国……？ ロンドンの新聞社に勤務する女性記者のアイリス（ケイト・ウインスレット）は、コラムを書いているジャスパー（ルーファス・シーウェル）との社内恋愛の行方に悶々としながら、3年間ずっと待ち続けている女性。その原因はジャスパーの二股かけだが、どうも最近是他の部署の美しい女性ばかりとイチャイチャしている様子。そんな中、社内のパーティーの席で、ジャスパーとその女性との婚約が大々的に発表されることに……。3年間もずっと1人の男性を見つめ続け、「結婚しよう」という声がかかるのを待っている女性なんて、今ドキ日本でも天然記念物モノだが、

保守的なイギリスにはまだこんな女性がいるわけだ……？

パーティー終了後、1人ロンドン郊外にある自分のコテージに戻り泣き崩れていたアイリスだったが、そんな時パソコンに着信メールが……。ここで、ロンドンのアイリスとロサンゼルスのアマンダとの間で交わされたチャットでの会話により、共にオトコによって深い心のキズを負った2人の女性の間で、2週間という期限付きでホーム・エクスチェンジの合意が成立。すると、明日の今頃は、互いに異国の地、異国の家の中で全く異なる環境下に入っているはず……。

## 2つの物語の見どころは……？

この映画の俳優陣はキャメロン・ディアスとケイト・ウィンスレットの2人だけでも豪華だが、さらにもう1枚ジュード・ロウという主役級がアイリスの兄グラハム役で登場する。グラハムはパブで飲んだ後、よく妹のコテージに泊まっていたから、ロンドン版「ホリデイ」は、アマンダとグラハムとの出会い、そしてその後の濃厚なセックス(?)を含むラブロマンスが見どころ……？

これに対し、アイリスのロサンゼルス版「ホリデイ」はバラエティー豊か……？ すなわち、アマンダの仕事仲間映画音楽作曲家のマイルズ(ジャック・ブラック)との出会い、ハリウッドの往年の大脚本家アーサー(イーライ・ウォラック)との出会い、そして何と他の女性との婚約発表をしたにもかかわらず、ロンドンからロサンゼルスに駆けつけてきたジャスパーとの再会、という複雑な人間模様の中で展開されるアイリスの再生物語が見どころ……。

## 愛情表現の豊かさはさすが！

日本でも最近の若い男は女性に対する愛情表現術が上達しているらしいが、古いタイプの日本人男性はそれが苦手な人が多い。口からでまかせでも、真っ赤なウソでもいいから、年がら年中「好きだよ」「愛してるよ」と言った方が、黙っているよりずっといいらしいが、頭でわかっているもなかなかそれができないのが情けないところ……。ところが、西洋人はその点が根本的に異なるもの。この映画を観ているとそれがものすごく顕著で、西洋人の愛情表現の豊かさはさすが。政治的な主張も法律的な主張も、口に出してナンボの世界だが、愛情表現も全く

それと同じだということがよくわかる。すごいナと思うのは、ロンドンにおけるアマンダもグラハムも、そしてロサンゼルスにおけるアイリスもマイルズもイーサンもそして90歳になるアーサーさえも、自分の気持ちをいかに相手に的確に言葉や表情そして身振り・手振りで伝えようかと努力している姿勢が顕著なこと。やはりこれが民主主義の根源なのだと、ヘンなどところで感心……。

## ジャスパーだけは許せない……？

この映画の登場人物は、90歳のアーサーを除いてそれぞれ男女間の悩みを抱えているが、1人を除いて全員がそれと向き合い努力している愛すべき人間たち。ところが、アイリスを振って別の女性と婚約したジャスパーだけは別……。

ジャスパーは3年間もアイリスをじらした挙げ句、同じ会社の別の女を婚約者に選んだ二股かけ男の典型。もっとも、婚約発表の直前にもクリスマスプレゼントをアイリスに届けてくるような男だから、とにかく女に対してはマメなのだろうが、そんな男にいつまでも固執しているアイリスは「男を見る目なし」と言わざるをえない……。そのうえ驚くべきことに、傷心のままロサンゼルスに旅立ったアイリスに対しても、「頼れるのは君しかいないんだ」と甘くささやきながら原稿チェックの仕事を押しつけてきたり、挙げ句の果ては、ロサンゼルスのアマンダの豪邸に現れて「これからも仲良くしたい」と発言したり……。婚約発表後もなお二股かけを続けようとするジャスパーだけは許せない……。

## 最高に充実したホリデイに……？

異国の地を訪れたキャメロン・ディアスとロンドンに住むジュード・ロウを主人公とし、ロンドンを舞台としたハッピーエンドのロマンティック・コメディというだけで1本の映画が作れるほど、ロンドンにおけるアマンダのホリデイは充実したものになったようだが、その詳細はあなた自身の目で確認してもらいたい。だって、いくら美男美女が一目で惹かれあったとしても、お互いさまざまな事情を抱えているはずだから、わずか2週間の間に一本調子でハッピー度が上昇とはいかないはず。ましてや、男女の恋の駆け引きにはウソもつきものだから。それは、グラハムのケイタイに頻繁に入ってくるソフィやオリヴィアという女性

(?)からの電話を見ても明らか……？

他方、誰が見ても、このホーム・エクスチェンジで大きく得をしたのはアイリス。だって、こんなチャンスがなければこんな豪邸に住むことはできず、またアーサーのような偉大な人物と知り合うこともなかったはずだから。ところが、そんなアイリスをジャスパーがわざわざロンドンから訪ねてくれば、ひょっとしてアイリスのオンナ心は再び揺れるの……？ アイリスの2週間のホリデイの充実度についてはそんな興味を持ってしっかりと確認してもらいたい。

もっとも、結論としては、2人にとって最高に充実した2週間のホリデイになったことは容易に推測できるはずだが……。

## ハッピーエンドの是非は……？

『ホリデイ』は、ロンドンとロサンゼルスという2つの国の物語がホーム・エクスチェンジで結びついたもの。他方、メキシコ人監督アレハンドロ監督の『バベル』(06年)は、モロッコ・アメリカ・メキシコ・日本という4つの国でバラバラに展開される物語が、一発の銃弾で結びついたもの。またこれは、そのタイトルどおり、神に対する人間の罪と神から下された人間への罰という点で統一されたすばらしい映画だった。その意味では、『ホリデイ』と『バベル』は2つの物語 vs. 4つの物語という違いこそあれ、似たような構成の映画……？

しかし全く異なるのは、エンディングの設定。すなわち、『バベル』はあくまで4つの物語がそれぞれ何らかの結論を見せるものの、それはあくまで、夫婦、父娘、叔母・甥を中心とした人間の営みの通過点……。しかしこの『ホリデイ』では、ロマンティック・コメディにふさわしく、メイヤーズ監督は大団円のハッピーエンドを用意した。

しかし、そもそもアマングとアイリスがホーム・エクスチェンジを合意したのは、互いにオトコの悩みがあったから。つまり、悩みがあるからこそそんな工夫が生まれてきたわけだ。ということは、映画の世界ではハッピーエンドで終わることができても、現実の世界では、最高の幸せがずっと続くことなど不可能……？ そう考えると、『ホリデイ』についてもあえてハッピーエンドにしない方がよかったのでは……？

2007(平成19)年3月26日記